

ヴィクラマ王の冒険—*Vikramacarita* 簡略版 訳注 (一) —

堀 田 和 義

はじめに^一

本稿は、ヴィクラマ暦などでも知られる古代の伝説的な英雄ヴィクラマ王の事績を扱った *Vikramacarita* (ヴィクラマ王の冒険) の和訳である^二。Edgerton 1926a の言葉を用いるならば、この文献には、(一) 南方版 (Southern Recension) ^三、(二) 韻文版 (Metrical Recension) ^四、(三) 簡略版 (Brief Recension) ^五、(四) ジャイナ教版 (Jainistic Recension) ^六、(五) ヴァラルチ版 (Varanuci Recension) という五つの版があるが、本稿が対象とするのは、このうちの (三) の簡略版である。

この版は、ジャイナ教版と並んで北インドのものとされ、その名の通り非常に簡潔で、他の版に見られる長い物語を大胆に省略している点などに大きな特徴がある。物語の大枠はシヴァとパールヴァティーの対話となっており、最初にバルトリハリ王からヴィクラマ王への王権譲渡、ヴィクラマ王が玉座を入手した経緯、ヴィクラマ王の死により玉座が埋められたことが語られる。そして、後代にこの玉座を発掘したボージャ王がその玉座に座ろうとするたびに、玉座に付いている三十二の小像が、順にヴィクラマ王の偉大な事績を語

り聞かせるとい入れ子構造になっている。Edgerton 1926a によれば、五つの版はいずれも失われてしまったオリジナル版から派生した（二次的な派生も含む）ものと考えられる。Edgerton 1926a は、これら五つの版に共通する部分の梗概をまとめる形でオリジナル版の構成の復元を試みており^四、五つの版のうちの（一）が最もオリジナル版に近いと結論付けている。

それぞれの版は、写本の奥付では様々な名前と呼ばれるが、本稿が対象とする簡略版は、*Sinhāsanaṭṭhakāḥ*（玉座の説話）、*Sinhāsanaṭṭhāṇṇakāḥ*（玉座の三十二の説話）というタイトルであった可能性が高いという^五。

オリジナル版の著者に関しては不明であり、五つの版の編者に関しても、ジャイナ教版とヴァラルチ版を除いて、事情は同様である。また、オリジナル版の年代に関して確実に言えることは、梓物語に登場するボージャ王の年代（十一世紀前半）を上限とし、ムガル帝国のアクバル帝の命によってペルシア語に翻訳された年代（十六世紀半ば）を下限とするということだけである。版によっては、引用される文献によつてもう少し年代を狭めることができるが、他の版に引用されていない場合には後代の挿入などの可能性が常に付きまとう^六。

本訳注では、Edgerton による批判校訂本（Edgerton 1926b）を底本とした。この批判校訂本では、三十三本の写本が使用（簡略版の写本は六本）されている。他にもボンベイから送られた十四本の写本があったようであるが、この写本を積んでいたのは、かの有名な豪華客船のタイタニック号であり、船とともに海に沈んでしまったという^七。

翻訳に際しては、Edgerton 1926a や Tötzsök 2007 という二種類の英訳を参考にし、章の並べ方は、オリジナル版の順序に並べ替えた Edgerton 1926b のものではなく、Tötzsök 2007 のように簡略版の写本通りの順序に従った^な。

【凡例】

一、ヴィクラマ王の名前は、原文では、Vikrama, Vikramasena, Vikramāditya, Vikramāṅka などの様々な表現が見られるが、翻訳においてはすべて「ヴィクラマ王」で統一した。他にも *epithet* などは、文脈の理解を妨げないような名前に変えて訳し、注に原語とその意味を記した。

二、翻訳においては、日本語としての読みやすさを考慮して、底本における文の切り方には必ずしも従わなかった。また、必要に応じて、原文にない主語や接続詞その他の最低限の言葉を補った箇所があるが、読みやすさを考慮して、インド学で多用される「^一」の使用は避けた。

三、詩節は二字下げにし、詩節の末尾にその章内での通し番号を付した。ただし、枠物語では、マンガラや権威ある言葉・格言などの引用の場合のみ二字下げにし、それ以外は散文と同様にした^{二〇}。

訳注

第一章

ウパニシャッドを知る者たちはそれをブラフマンと呼び、他の者たちは最高の第一原理や純粹精神、あるいは宇宙の生起の原因、自在神と呼ぶ。障害を滅ぼすために^二、その者に敬礼。^三

無知という海に沈んでいる人々を彼岸へと渡らせ、賢明さを授けることに唯一巧みであり、ナーラダにヴィーナーの技術を授けたサラスヴァティー^二の両足をいま念じよう。^三

それ自体^三は歓喜から成り、聖者たちの両目を超越していてその領域とならず、あたかも家の中の灯火のように賢者たちの心に光明をもたらす、ラーマの御名を心の中で称えよう。^三

水面に映った月の円盤のように、常に善き人々の心の中で輝く、その歓喜と識別というあり方の途切れることのない光明^{二四}であるシヴァを崇拜しよう。^四

これから、賢者たちの心を喜ばせるために、玉座の三十二の小像が語る様々な物語の興味深さにより魅力的であり、散文と韻文から成る物語作品が語られる。次のように言われている。

知識の宝庫たる者たちは詩人たちの主の言葉を楽しむことによって喜びを感じるが、他の者たちは喜びを感じない。月長石だけは月光によって溶けるが、他の石は決して溶けない。^五

さらにまた、次のように言われている。

賢者はその洞察力を通じて、情調や感情によって理解される文芸的な情熱を理解することができるが、他の者は理解することができない。賢明な孔雀たちは雨雲の低い轟きを知ることができるが、白鷺は知ることができない。^六

ある時、名譽によって人々を残らず輝かせる、月のように輝くシヴァが、神々に喜びをもたらすカイラーサ山に登って、楽しみに散策していました。すると、パールヴァティー^五は愛する夫に尋ねました。^七

「実に、修行者たちが、苦痛をもたらす苦行によってヨーガを実践しても、心の中でさえあなたを捉えることができません。あなた、そのようなあなたに近付いて快適に過ごしている間に、私にある神聖な考えが

閃きました。(八) 神々の主よ、善き人々は『あなたを心に念じれば、願望を叶えてくれる』と言います。それゆえ、認識から成る灯火であるあなたは、私のために物語を語って下さい。(九) 神々の主よ、私のためを思つて、歓喜があふれ出し、好ましく、甘く、情調に満ちた物語を語って下さい。(十)

すると、シヴァ^{一六}は満足という甘露に満たされて、愛しい妻に望みに適つた優しい言葉をかけました。(十二)

「昔々のこと、月長石でできた、神々しく、美しい玉座がありました。その玉座には、宝石を散りばめた三十二の小像が付いていました。(十三)そして、それらの一つ一つには、驚くべき雄弁さが備わっており、蓮のような目をした女よ、一つ一つがボージャ王に話しかけたのです。(十四)まずは、玉座は誰のものなのか。また、どうやってボージャ王が手に入れたのか。月のような顔をした女よ、そのすべてをこれからあなたに話しましょう。(十四)」

第二章

シヴァ^{一七}は言いました。

「南部地方にウツジャイニーという都があり、そこにはバルトリハリという名の王がいました。女神よ、あたかも匂いによつて花が、太陽によつて天空が、春によつて森が輝くように、彼によつて都が輝いていました。(一) チャコーラ鳥のような目をした女よ、比類のない美質を備え、あらゆる処世術に通じており、心の

広いバルトリハリ王が王国を治めていました。(二)

そのバルトリハリ王には、アナンガセーナーという名の、非常に美しく、幸運に恵まれた妻がいました。ガゼルのような目をしたその女は、性愛の酔いを引き起こす魅力という甘露の源泉であり、王の人生にとつてただ一つの確かなものでした。(三) その女は若さによつて驕り高ぶっており、若々しい手足によつて輝いていました。それはあたかも、春との出会いを示す色合いを帯びた蔓草が、新芽によつて輝いているかのようでした。(四) あたかも、月にとつての月光のように、詩人にとつての弁舌の女神サラスヴァティーのように、王にとつてのその妻は、命よりも大切なものでした。(五)

その頃、その都に住むバラモンが、呪文を習得していたにもかかわらず、運命の悪戯により、無一物の無力な者となつてしまいました。女神よ、無一物ゆえに、そのバラモンは激しく落胆し、ドウルガー^{一八}を崇拜しました。(六) すると、彼の信愛によりドウルガー^{一九}は満足し、「賢者よ、望みの物を選び取りなさい」と言いました。(七)

すると、バラモンは女神に答えました。

「私を不死にして下さい。」

ドウルガー^{二〇}は彼に「よろしい」と言つて、神聖な果実を一つ与えました。(八)

「その果実を飲み込むだけで、不死になるでしょう。」

女神のこのような言葉を聞くと、そのバラモンは考えました。(九)

「果実を食べるだけで不死が得られる。しかし、長いあいだ貧しく、他人の施し物を求めて、苦し気な顔をしていた者にとって、不死は幸福ではなく、苦しみをたらすだけだ。貧しく、愚かで、誉れがなく、他人の悪口を言っている者が生きていても、その命は大地の重荷となってしまう。㊦ あたかも水における泡のように、火における火花のように、人を助けない者は死ぬためだけに生まれてくるのだ。㊦ 次のように言われている。

貧しい者、病気の者、愚かな者、異国にいる者、常に人に仕える者。これら五つは生きていても、死んでも同然であると言われている、バラタの後裔よ。㊦ ㊦

それならば、この私が長生きして何になるだろうか。それゆえに、この果実は王に差し上げよう。王が長生きすることで万人を助けることになり、人民も幸せになる。というのも、

布施によって善き人々の貧しさを鎮める気前の良い者、途切れることのない名誉によって全大地を輝かせる者、ヴィシュヌ^三の蓮のような御足に近侍する者。彼らは長生きして、三界において目的を達成すべきである、おお、シヴァよ。㊦ ㊦

布施などという美質によって万人の苦悩を取り除く者、また、他者のために身をやつす者、心を抑制し

てシヴァ^{二三}の蓮のような御足にたえず敬意を表する者。彼らは幸いであり、彼らこそが目的を達成しており、彼らこそが最高の世界を勝ち取っている。(十四)

また、ある者たちは次のように言っている。

生まれ、行い、美質によつて、いかなる目的も達成していない人の生まれは、ただ名ばかりのものであり、それはあたかも、氣まぐれに発せられた言葉のようなものである^{二四}。(十五)

このように考えて、バラモンはその果実をバルトリハリ王の手に渡しました。すると、王は考えました。「これによつて、私は長生きすることができる。しかし、アナンガセーナ^{二五}が先に死んでしまったら、生きていてもしょうがない。愛しい妻なしで生きることが何になるだろうか。というのも、

あたかも、稲妻のない雨雲、灯芯のない灯火のように、愛しい妻なしでは、私は一瞬たりとも生きることが望まない。(十六)

また、ある者たちは次のように言っている。

月は太陽のようになり、柔らかに吹く風も稲妻のようになる。花輪は針のようになり、白檀の軟膏は火花のようになる。光は闇のようになり、運命の悪戯により、生命も重荷となる。ああ、なんと、愛しい妻との別れの時は、世界の帰滅の時のようだ。^(十七)

このように考えて、王はその果実をアナンガセーナーに与えました。しかし、彼女が命よりも愛するのは、厩舎の主人でした。そこで、アナンガセーナーは厩舎の主人に果実を与えました。しかし、彼が愛するのは女召使いでした。そこで、彼は女召使いに与えました。すると、彼女は命よりも愛する他の門番に与え、彼も命よりも大事な他の女に与えました。さらに、彼女が命よりも愛する他の男に与えると、男はその果実を受け取って考えました。

「この神聖な果実は、王様に相応しい。」

このように考えて、彼はバルトリハリ王への贈り物としました。王はその果実を目にすると、王妃に尋ねました。

「お前はこの果実で何をしたのだ。」

すると、王妃はありのままを話しました。その後すぐに調べさせて、王は事の次第をすべて知りました。そこで、王は言いました。

「次のように言われている。

常に気にかけていた女は、私に対する興味を失っていた。彼女は他の男を求めており、その男も他の女を愛していた。その一方で、他のある女は私でも満足を感じる。どいつもこいつも、糞くらえだ。性愛も、この女も、そして私自身も。〔十〕

さらにまた、

論書は非常に堅固な心によつて考察しなければならず、王は敬われていても恐れなければならない。若い女は膝の上においても守らなければならない。論書、王、若い女に、どうして堅固さがあるだろうか。〔十一〕

九

このように考えて、王は世の中が嫌になったため、幸運なヴィクラマを自分の王国の王位に就けて、世界の抛り所であり、形がなく、変化することなく、輪廻の海への対抗手段であり、汚れない、原初のプルシャを崇拜するために、森の中へ入って行きました。というのも、

ガゼルのような目をした女よ、私はあなたに言っておく。虚ろな浮世の道を進んで解脱の最高の境地へと赴く人々にとつては、ヴィシユヌ^{二五}の崇拜だけが確かなものである。^(二五)

聖地において、日に三度の沐浴を実践する修行者もいる。他の者たちはヨーガに努め、さらに他の者たちは苦行を好む。しかし、私は世にも明瞭で、最高の認識の威光を備えた、ラーマと呼ばれる者を念じよう。非常に好ましい、心の中の威光を。^(二六)

第三章

その後すぐに、ヴィクラマ王が王国を治めました。というのも、攪乳棒で混ぜられた乳海の乳の滴のように輝く、名声の驚くべき煌めきによって遍く三界を輝かせ、善き人々を保護し、ただ一人の正義を確立する者であり、その心は神々、バラモンに対する信愛を好む——尊敬すべきヴィクラマ王は、そのような人物だったからです。^(二)そして、彼が王国を治めている時に、ある裸形の行者がやって来ました。その者が供養を始めると、王は彼の補佐役を務めました。その機会に、屍鬼がヴィクラマ王に満足しました。^(二六)

その後、彼の治世のある時期に、ウルヴァシーとランバーという天女が天界のインドラ^{二七}の前で甘美な踊りを踊りました。両者は多くの者たちの前で、神々^{二八}のような、穏やかさと激しさという感情を表現した、

優れた踊りを実演していました。しかし、神々の王インドラには、誇り高い天女たちの優劣が分かりませんでした。また、アスラの王たちにも、キンナラの王、人間の王たちにも分かりませんでした。(二) 神々の集会で魅力的に踊る二人の優劣は、人間の王などにも分からなかったのです。そこで、両者の優劣を知るために、ヴィシヌヌ^{二九}の兄の偉大なインドラが、その武勇が三界に知れわたったヴィクラマ王を呼びました。そして、インドラ^{三〇}に呼ばれて偉大なインドラの集会に行くと、技芸に通じ、王の技芸の宝庫である^三ヴィクラマ王は、ウルヴァシーの勝ちを認めました。

「主よ、神々の王よ、ウルヴァシーの勝ちです。」

インドラは尋ねました。

「なぜですか。」

王は答えました。

「神様、演劇論の知識に従っているので、ウルヴァシーの勝ちなのです。」

インドラは言いました。

「王よ、あなたはあらゆる技芸に通じており、バラタの演劇論を会得しています。」

そこで、インドラ^三は満足して、王に火のように輝く一對の衣と、神聖な宝石が散りばめられ、月長石でできた玉座を与えました。その玉座には、あたかも光の束のように強く光り輝く、三十二の小像が付いていました。王はそれを持って自分の都に帰りました。そして、縁起の良い時が来ると満足げに玉座に座り、王

は長い間、王権の樂を享受しました。

第四章

その後、ヴィクラマ王はシャーリヴァーハナ王を討つためにピータスターナへ向けて出發しました。戰鬪用の象、馬、戰車軍によつて恐ろしいヴィクラマ王がピータスターナへ向けて進軍すると、シャーリヴァーハナ王も怒りにより雄叫びを上げながら、軍隊を引き連れて戰鬪へと向かいました。というのも、一般に、これはクシャトリヤたちにとつて家柄に相應しい行いだつたからです。(一)

二人の王の軍勢の間には壯絶な戰鬪が起りました。その戰鬪では、星の光は武器で切られた傷から流れる大量の血でかき消され、怒りで立ち上がった駿馬の蹄により粉々になつた大地の塵が立ち込め、軍隊はあたたかも明け方の光明によつて闇を滅ぼす太陽のようでした。(二) 太鼓、法螺貝、軍鼓の音により低く恐ろしい戰争の音を耳にすると、大地では雌のジャッカルたちが、空では天女たちが、戰鬪で倒れた男たちを熱望して勢いよく走つて集まり、踊りを踊つていました。(三)

その恐ろしい戰鬪でヴィクラマ王は倒れ、命を捨てた後は、優れた名声により太陽へと赴きました。そのため、その玉座に相應しい者は誰もいなくなつてしまいました。すると、天の声が言いました。

「この玉座をここに置いたままにしてはいけません。」

そこで、大臣たちは協議し、清浄な場所を見つけると、どこかある場所に埋めました。

第五章

それから、多くの月日が経ちました。その場所には、あるバラモンがユガンダリーの種をまいて実りました。そして、バラモンは玉座の埋まっている場所に庵を作って、その中に入りました。ちょうどその時、ポージャ王が狩りを楽しみながら、その道を通り過ぎました。王の衛兵を目にすると、そのバラモンは言いました。

「おお、いらつしやい。美味しいウルヴァールカの実があります。ヴァールカの実もあります。好きなだけお取りください。」

彼の言葉を聞くと、従者たちは畑の中に入り、好きなだけ取ろうとしました。そこへ、バラモンが庵から出てきて見たところ、衛兵が畑を荒らしているのが見えました。それを目にすると、バラモンは叫びました。

「おお、悪党どもめ、どうして私に盗みを働くのだ。すぐに出ていけ。さもないと、王に言いつけてやるぞ。」

すると、従者たちは怖くなり、恐れをなして外へ出ていきました。しかし、バラモンが再び庵に入ると、衛兵に戻って来るように言いました。

「おお、どうして行ってしまうのですか。どうぞ、いらつしやい。」

このように、庵に入ると与えようとし、そこから出るとけちになりました。その出来事はボージャ王の耳に入りました。そこで、王も庵に入ってみると与えなくなり、そこから出るとけちになりました。そのため、王は考えました。

「これは特殊な土地だ。次のように言われている。

水に入れたゴマ油、悪人に打ち明けた秘密、適切な者に対する布施、賢者に授けた学問は、たとえ僅かであっても、そのものの力によつて自ずと拡大する^{三三〇}。(一)

このように言うと、その場所を掘りました。すると、月長石でできた玉座が出てきました。そこで、王はダーラーの都に持つて帰ろうとしましたが、大臣が言いました。

「王様、玉座が誰のものであるのかを、誰が知っているでしょうか。そのため、ここで捧げ物をするべきです。」

すると、王は土地の精霊を崇拜してから、玉座を持ち帰りました。そして、王は大臣に言いました。

「お前の知恵により、持ち帰ることができた。そのため、大臣の忠告がなければ、王の命など取るにたりないものだ。次のように言われている。

川岸に生えている木々、主人のいない女性、大臣のいない王は、長生きすることができない。(一)

若さのない幸運、蓄えのない要塞、知識のない離欲は、輝きを放たない、王よ。(二)

異端の者における自在力、悪人との同盟、不貞な女を喜ばせること、邪悪な者との友情、腹違いの兄弟に対する愛情、召使いに対する怒り、賭博者の言葉、哀れな者の憐れみ、身持ちの悪い女への献身、盗賊に対する呪い、愚者に対する助言のように、大臣のいない王国は無益なものとなってしまう。(四)

大臣は答えました。

「年長者の言葉に従い、賢者たちからの敬意を求め、道理に従って示された行いをなす者が果報に与れないなどということはありせん。(五)」

第六章

このように大臣の言葉を聞いて満足すると、王は玉座を持って都に入りました。そして、千本の柱を備えた特別な宮殿を建てさせて、そこに玉座を安置しました。その後、玉座に座るのに縁起の良い時刻を見計ら

つて、灌頂のための道具を準備させました。ドウールヴァー草、白檀、石黄などの吉兆の物を集めさせ、様々な種類の果実を持つて来させました。さらには、虎の皮に七つの大陸を備えた大地を描かせ、近くに劍、傘、仏子を置かせました。また、ヴェーダに通じたバラモンや王家の系譜に通じた吟遊詩人が呼ばれ、喜びをもたらす楽器が準備されました。他にも、夫に忠実で息子に恵まれた有徳な女性たちが、輝く吉兆の灯火を手に持つてやつて来しました。すると、占星術師が言いました。

「王様、縁起の良い時刻が過ぎようとしています。お急ぎ下さい。」

このような言葉を聞くと、王は玉座に座ろうと歩みを進めました。そして、王が玉座に座ろうとするやいなや、ある小像が言葉を発しました。

「王様、この玉座に座つてはいけません。ヴィクラマ王のように度量の大きい者ならば、座ることができません。」

王は答えました。

「好ましいというだけで、私は十万以上の金貨を与えます。私は気前の良い者です。私よりも気前の良い者が他にいるでしょうか。(二)

私は好ましいというだけで、十万以上の金貨を与えるのですから、私よりも度量の大きい者が他にいて

しようか^{三四}。仰つて下さい。」

すると、小像は言いました。

「あなたの度量の大きさは、欲に塗れたものです。というのも、あなたは自ら自分の度量の大きさを語っているからです。あなたほど非難すべき者が他にいないでしょうか。(一)

王様、自分が与えたものを自分の口で語る者は、非難すべき者です。それゆえに、もしあなたが自分のことを寄進者と呼び、自分が与えたものを繰り返し口にするならば、あなたは称賛に値しません。」

すると、王は言いました。

「ヴィクラマ王がどれほど度量が大きかったのかをお話し下さい。」

第一話

小像は言いました。

「困っている者が目に留まったら千の金貨を、会話をした者には一万の金貨を、さらには、言葉で笑わせ

ることのできた者には十万の金貨を、王は与えるべきである。また、満足させる者には一千万の金貨を与えるべきである。』昔々、ヴィクラマ王は、いつも出納官にこのように命令していたそうです。(二)

王様、あなたがこのように度量が大きいならば、この玉座に座することができます。」

第二話

そして、別の縁起の良い時刻に王が玉座に座ろうとすると、二番目の小像が言いました。

「王様、この玉座に座ることができるのは、ヴィクラマ王のように勇気があり、度量の大きい者です。」すると、王が答えました。

「その話をして下さい。」

小像は言いました。

「ボージャ王よ、お聞き下さい。」

ヴィクラマ王は、誰であれ、新奇で、珍しく、興味深い内容の話をする者には、千の金貨を与えていました。このような折に、ある者が外国からやって来て言いました。

「王様、私は外国からやって来ました。その国にはチトラクータ山があり、その山には美しい苦行林があります。その苦行林には願いを叶える女神がおり、あるバラモンがそこで供犠を行っています。どれほどの時間が経ったのかわかりませんが、森の中にただ一人であり、話しかけられても答えません。そこには山の中から水が流れており、もしその流れで沐浴をしたならば、善悪が見分けられます。」

その話を聞くと、王はその場所へ行きました。王は手に剣を持ち、裸足で女神の神殿にやって来ました。沐浴場で正しく沐浴し、女神のもとを訪れてから、祭場へ行きました。そこでは、バラモンが供犠を行っており、そこから外に捨てられたたくさんの灰が山のようにになっているのが見えました。すると、王は言いました。

「おお、バラモンよ、あなたが供犠をしている間に、どれほどの時間が経ちましたか。」

バラモンは答えました。

「王様、百年が経ちました。それにもかかわらず、女神は満足してくれません。」

すると、王は自らの手で供物を祭火に供べました。それでも、その女神は満足しませんでした。そこで、王が剣で自分の頭を切り落として火に供べようとする、女神が満足して言いました。

「王よ、望みの物を選び取りなさい。」

王は尋ねました。

「これほどの日々の間、バラモンが苦勞しているのに、どうしてあなたは満足しなかったのですか。」

女神は答えました。

「このバラモンの心が堅固でなかったからです。次のように言われています。

指先で数えて捧げた祈り、中指の節を飛ばして数えて捧げた祈り^{三五}、散漫な心で捧げた祈り。これらはすべて無意味なものとなってしまふ。(二)

木片にも、石にも、土塊にも神はいない。神は信心の中にいる。それゆえに、信心こそが根本原因である。^(一)」

王は言いました。

「女神よ、もし満足したならば、このバラモンの願いを叶えてあげて下さい。」

すると、女神はバラモンの願いを叶えました。王は自分の都へ帰って行き、人民は「万歳、万歳」という声で出迎えました。

小像はこのような物語を語りました。

「王様、もしあなたがこのように度量が大きいならば、この玉座に座ることができます。」

第三話

それから、王が再び縁起の良い時刻を見計らい、玉座に座ろうとやって来ると、三番目の小像が言いました。

「王様、この玉座に座ってはいけません。ヴィクラマ王のように度量の大きい者ならば、ここに座ることができます。」

王は答えました。

「その王の話をして下さい。」

小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

かのヴィクラマ王の王国には、足りない物がありませんでした。そこで、王は考えました。

「私のこれほどの王国も来世を保証するものではない。そこで、シヴァ^三を崇拜しよう。そうすれば、現世と来世という両方の世界が成就するだろう。獲得した財産は、神々、尊敬すべき者、バラモンに布施すれば、長寿をもたらすだろう。さもなければ、財産の行方は誰にも分からない。次のように言われている。

どこからやって来て集まるのか。散り散りになった後はどこへ行くのか。雲と財産の行方を正確に知ることはできない。」⁽¹⁾

このように考えて、王は祭式に着手しました。祭式の準備をすべて行い、供犠に必要な物を持って来て、神仙たち^{三モ}、ガンダルヴァ、四ヴェーダに通じたバラモン、リトウヴィジュ祭官を呼びました。そして、海を呼ぶために、あるバラモンを派遣しました。すると、そのバラモンは海岸へ行き、水中に香と穀付きの穀物を投げ入れました。バラモンは言いました。

「ヴィクラマ王の祭式に家族を連れて来て下さい。」

すると、海がバラモンの近くにやって来ました。

「バラモンよ、王が私を呼んでくださったという、そのご好意を嬉しく思います。しかし、私には参加する余地がありません。次の四つの宝石を王に渡して下さい。宝石の効力をお聞き下さい。一つ目は思い浮かべた財産をもたらししてくれます。二つ目は望みの食べ物をもたらししてくれます。三つ目は四つの部隊^{二八}から成る軍隊を生み出し、敵たちを滅ぼしてくれます。四つ目は宝石をもたらししてくれます。」

このように言って与えました。それらを受け取ると、バラモンは王宮に帰って来ました。それらを王の手に渡して、宝石の効力を王に伝えたところ、王は言いました。

「バラモンよ、これらの中から好きな物を一つ取りなさい。」

バラモンは答えました。

「王様、家で決めたと思います。」

このように言つて、バラモンは家に帰りました。家では「これをもらうべきだ。いや、こつちをもらうべきだ」と言つて、彼と妻、息子、嫁の間に諍いが生じました。そのため、バラモンは嫌気がさしてしまい、寶石を再び王の手に渡して、事情を説明しました。

「私たち四人の間に諍いが生じました。そのため、あなたが四つの宝石を受け取つて下さい。」

王は熟考した後、それら四つの宝石をすべてバラモンに与えました。バラモンは喜んで家に帰りました。

このような物語を語ると、小像は言いました。

「ボージャ王よ、もしあなたがこれほどに度量が大きいならば、この玉座に座することができます。」

第四話

そして、再び縁起の良い時刻を見計らい、王が玉座に座ろうとすると、四番目の小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、ヴィクラマ王は狩りの楽しみに魅入られて、森の中へと入って行きました。その森で、ある野猪が現れたので、王はその後を追いました。野猪は森を離れてどこかへ行ってしまう。王は道に迷い、彷徨い歩いていたところ、あるバラモンが薪を集めるためにそこにやって来ました。王は彼とともに都へ帰り、そのバラモンに多くの財産を与えて言いました。

「おお、バラモンよ、あなたにはどうやっても借りを返すことができません。あなたは私を助けてくれたのですから。」

そこで、バラモンは「この者の心は真実か偽りか」と考えて、策略をめぐらしました。

ある日、彼は王子をさらって来ました。すると、王子のために、王は長いあいだ苦しみました。そして、あらゆる場所でその息子を探させましたが、どこにも見つかりませんでした。そのような時に、バラモンは王子の装飾品を持って市場へ売りに行き、警察官に見つかりました。警察官はバラモンを捕まえて、王のもとに連れて行きました。すると、王は言いました。

「尊い方よ、どうしてこんなことをしたのですか。」

バラモンは答えました。

「王様、このような破滅的な考えが生じたのです。なすべきことをなさって下さい。」

そこで、大王は言いました。

「この子殺しに相応しい罰を与えなさい。」

このように言つて、王は臣下の者たちに殺させようとなりました。しかし、その時、王は「この者を殺させて何になるだろうか」と考えて、釈放しました。

「あなたは私に道を示してくれました。私はその一步に報いることができましたが、他の歩みには借りがあります^{三九}。」

このように言つて、バラモンを送り出しました。すると、バラモンは王子を連れて来ました。

「王様、あなたの真実を見極めるために、策略をめぐらせたのです。」

王は答えました。

「助けてくれた人を忘れるような者は、至上の者とは認められないものです。」

このように物語を語った後、小像は言いました。

「おお、王様、このように勇敢な者ならば、この玉座に座することができます。」

第五話

五番目の小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、ヴィクラマ王のもとに、ある放浪者^{四〇}が外国からやって来て報告しました。

「王様、海の真ん中に島があり、その島には大きな苦行林があります。苦行林にはドウルガー^{四一}の寺院があり、そこには美しい一組の男女がいますが、彼らは死んでいます。その壁には次のように書いてあります。『誰かがここで女神に頭を捧げれば生き返るだろう。』」

これを聞くと、王はその場所へ行きました。そして、女神の寺院に入ると、そこで死んでいる一組の男女を見ました。彼らを見ると、王は自分の喉に剣を当てました。すると、直ちに女神が現れ、王の手を止めました。

「王よ、満足したので望みの物を授けましょう。望み通りに選び取りなさい。」

王は答えました。

「女神の恩寵により、この一組の男女が生き返りますように。」
すると、彼らは生き返り、王は自分の都に帰りました。

小像は言いました。

「王様、このように勇気がある者ならば、この玉座に座ることができます。」

第六話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、ヴィクラマ王は諸方の征服に出かけ、ドウルガー^{四二}の寺院の近くのあるマンゴー林で野営しました。そこにいた女神の信者が言いました。

「王様、私は五十年間、梵行を実践することで女神を崇拜してきました。いまや女神は満足して言いました。『ヴィクラマ王のもとへ行きなさい。彼があなたの願いを叶えてくれるでしょう。私が彼に言っておきました』と。そのようなわけで、あなたのもとにやって来たのです。」

王は考えました。

「女神は命令していない。しかし、この男は困っている。」

このように考えると、その場所に都を作り、彼を王位に就けました。そして、その嘘つきのバラモンに四つの部隊^{四三}から成る軍隊、財産、黄金、十六歳の少女を百人与えました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座ることができます。」

第七話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、ヴィクラマ王のもとに宝石鑑定士が宝石を持ってやって来て、王が宝石を買いました。そして、別の機会に、珍しい宝石を王に差し出すと、王は言いました。

「このようなものは他にもあるのか。」

宝石鑑定士は答えました。

「私の村に十個あります。それぞれが一千万以上の金貨の値打ちです。」

すると、王は一億二千五百万の金貨を与えました。王は宝石鑑定士と一緒に人を派遣しました。

「この者で行って、速やかに宝石を持ってきなさい。」

召使いは「四日で戻って、王様の御足に触れるようにいたします」と言ってお掛けました。そして、四日目に宝石を持って王のもとへ戻る時、町の近くの川が洪水で道に溢れており、誰も渡らせることができません

んでした。ちょうど、ある人がやって来たので、「おお、渡らせて下さい」と頼みました。

彼は答えました。

「どうしてそんなに急ぐのですか。」

そこで、その使者は彼に事情を話しました。すると、渡し守は言いました。

「私に宝石を五つくれるならば渡してあげましょう。」

そして、使者は宝石を五つ彼に与えて川を渡ると、残りを持って行つて事情を話したうえで王に渡ししました。

「王様、命令には背いていません。次のように言われています。

権威、名声、バラモンの保護、布施、享受、友人の保護。これら六つの美質を備えていないならば、王に頼つて何の利益があるだろうか。(一)

王の命令に背くこと、バラモンを敬わないこと、妻の寢床を別にすることは、武器を用いない殺害と呼ばれる。(二)

すると、王は満足しました。

「お前は私の命令を守った。これら五つの宝石をお前にあげよう。」

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

第八話

八番目の小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、大臣の言葉に従ってヴィクラマ王が大地を散策していて、日が沈むと、森の中のある木の下に立っていました。ちょうどその木にはチランジーヴィーという名の鳥がいました。その鳥の友人たちは散策していましたが、夜になると合流して、「誰が何をしたのか。そして何を聞き、何を見たのか」ということをお互いに話し合いました。すると、ある鳥が言いました。

「今日は昼も夜も悲しい思いをしました。なぜかって。私には一人息子を持つ前世からの友人が海の真ん中にいます。そこには羅刹がいて、王が羅刹の食用に毎日一人の人間を与えています。このように順序が決まっており、明朝が私の友人の番なのです。そういうわけで、私は憂慮しているのです。」

鳥のこのような言葉を聞くと、王は明朝、魔法の靴によりその場所へ行きました。そこには一つの岩があり、その上に人が座ると、羅刹がその者を食べることになっていました。王がその岩の上に座ると、すぐに羅刹もやつて来て、見たことのない人物を見て言いました。

「お前は誰だ。なぜ自分を滅ぼすのだ。私は満足したので、望みの物を選び取るがよい。」
王は答えました。

「もし満足したならば、今日からは人間を食べるのをお止めなさい。」
すると、羅刹はその通りに受け入れ、王は都に帰りました。

小像は言いました。

「このように勇気のある者ならば、この玉座に座ることができます。」

第九話

九番目の小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、ヴィクラマ王が大地を散策して、町や村、城砦を見ていたところ、ある町にたどり着きました。そこではある商人がパーターラ界にいたるまで貯水池を掘っていました。水が出ませんでした。そして、がっかりした商人が女神を崇拜すると、姿は見えないけれども声が聞こえました。

「ここで三十二の吉相を備えた人間を犠牲として捧げれば水が出るでしょう。」

それを聞くと、商人は十バーラ^{四四}の黄金でできた人形を作りました。

「自分を捧げる者は、これを受け取るがよい。」

彼はこのように約束しました。

しかし、誰も自分を捧げる者はいませんでした。そのことを聞くと、王は夜に美しい池に行つて、自分を捧げる準備をして、「ここにおられる女神が喜ばれますように」と言いました。そして、自分の首を剣で切ろうとするやいなや、女神がその手を止めて言いました。

「王よ、満足しました。望みの物を選び取りなさい。」

王は答えました。

「どうかこの池を水で満たして下さい。」

すると、池が水で満たされ、王は自分の都に帰りました。

小像は言いました。

「王様、このように勇気のある者ならば、この玉座に座することができます。」

第十話

十番目の小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、ヴィクラマ王は偉大な聖者に会いました。そして、会話している時に王が言いました。

「あなたは不死をもたらすことができますが、それはどうやって生じるのですか。」

すると、聖者は答えました。

「もし呪術を実践すれば、不死になることができます。」

王は言いました。

「実践したいと思います。」

そこで、聖者はある呪文を授けて言いました。

「夜間だけの食事、梵行、地面で寝ることなどにより、一年で呪文の効力が現れるでしょう。そうしたら、十回に分けて供儀を行いなさい^{四五}。供儀が満了すると、火の中から一人の男が現れて、神聖な果実をくれる

でしょう。その果実を食べれば不死になることができます。」

すると、王はその通りに呪文の効力を現し、果実を手に入れました。しかし、王は果実を持って帰る途中で、「幸あれ」と言つて祝福する年老いたバラモンに出会つたので、彼に果実をあげてしまいました。

小像は言いました。

「このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

第十一話

十一番目の小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ヴィクラマ王の都に住むある商人の財産には限りがありませんでした。やがて彼が亡くなると、彼の息子が誤つた道へ財産を投じ、友人たちに諭されても彼らの言葉を聞きませんでした。こうしてその財産を失つて無一文になり、彼は外国へ行きました。そして、道を歩いていてある町にたどり着くと、そこには森がありました。その森では、夜になると女が泣き叫んでいました。

「おお、誰か私を助けて下さい。」

このような声を聞くと、彼は町の人々に尋ねました。すると、人々は答えました。

「この森には羅刹と女がいます。その女の嘆き、泣き叫ぶ声がいつも聞こえるのですが、誰も何が起きているのかを確かめることができないのです。」

以上のことを見聞きすると、その商人の息子は自分の町へ帰り、王にこの出来事を報告しました。すると、王は盾と剣を手にとって彼とともに出発し、その町にやって来ました。そして、夜になると、その森で女が泣き叫んでいました。それを聞くと、王はその声に導かれて夜の中に消えて行きました。ちょうどその時、羅刹が女を湿った木の枝で四六殺そうとしていたので、王と羅刹の間に戦いが起こり、王が羅刹を倒しました。すると、女は王に言いました。

「王様、あなたのおかげで、私の悪業が減ほされました。」

王は尋ねました。

「お前は誰だ。」

彼女は答えました。

「私はこの町に住むバラモンの妻でしたが、若さに酔い痴れて夫を欺きました。そして、私の性格が原因で、死ぬ間際の夫に『夜の森で羅刹がお前を殺すだろう』という呪いをかけられたのです。しかし、その後で、『誰かが羅刹を殺したならば、お前は呪いから解き放たれるだろう』と言って、彼は情けをかけました。」

そして、あなたのおかげで救われたのです。どうか九つの水瓶に入った私の財産を受け取って下さい。」

王は言いました。

「女の財産を受け取ることはいけません。」

女は答えました。

「まもなく私の命は尽きます。そうしたら、あなたが私の財産を享受して下さい。」

すると、王は財産を商人に与えてしまつて、都へ帰りました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

第十二話

十二番目の小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ヴィクラマ王が国を治めている時に、ヴィーラセーナという名の王がおりました。ヴィーラセーナ王の吟遊詩人がやつて来て、作法に従つてヴィクラマ王を賞賛しました。そして、ヴィーラセーナ王を次のように

描写しました。

「ヴィーラセーナ王ほど度量の大きい者は誰もいません。過日、春の祭典の際には、一千万の金貨を布施しました。このように、かの王は貧しさを滅ぼす者です。」

すると、ヴィクラマ王は満足して、出納官を呼びました。そして、王は言いました。

「この吟遊詩人を宝庫へ連れて行きなさい。そして、満足するだけの財産を彼に与えなさい。」
すると、出納官は答えました。

「王様、喜捨と国政^{四七}以外に使ってしまった額をお知り下さい。」

このように言うのと、「五億」と記された紙を見せました。マーガ月の白分七日目に^{四八}、これだけの財産が消費されたのです。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座ることができます。」

第十三話

再び小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、王は聖地巡礼に行き、その地のガンジス川近くにあるニルマレーシュヴァラの寺院で休んでいました。そこで夜になると、ガンジス川に流されたバラモンが叫んでいました。

「おお、溺れている私を誰か助けて下さい。」

しかし、誰も水の中に入りませんでした。そこで、王がバラモンを救い出したところ、バラモンは言いました。

「あなたは私の命を助けて下さいました。私は十二年間、ナルマダー川の岸辺で半身を水に浸して呪術を実践しました。その果報は、望んだ時に死ねること、身体が天界へ行けること、天の乗り物に乗れることです。このような果報をあなたに差し上げます。」

その声を聞くと、バラモン羅刹^{四九}が王の目の前に現れました。その者はアシヴァッタ樹に住み、非常に邪悪で恐ろしく、髪を逆立て、残りの身体は骸骨となっていました。

王は尋ねました。

「お前は誰だ。」

羅刹は答えました。

「王様、私はこの町に住む食欲な祭官でした。禁じられた報酬^{五〇}を受け取ったために、バラモン羅刹にな

つてしまったのです。五千年の時間が満ちたのですが、今もなお償うことができません。」
王は言いました。

「今日、私に手に入れた果報により、お前は天界へ行くがよい。」

王がこのように言うと、羅刹は天の乗り物に乗って、天界へ行きました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座ることができます。」

第十四話

再び小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、王が大地を散策していたところ、ある苦行林の中のシヴァの寺院にたどり着きました。王は浅瀬で沐浴し、神を拝した後、その近くに座りました。

すると、そこにいた偉大な聖者が尋ねました。

「あなたは誰ですか。」

王は答えました。

「私は旅の途中の者で、ヴィクラマ王と言います。」

聖者は言いました。

「王様、かつて私はウツジャイニーへ行った時にあなたを見かけました。どうして王国を放置してたった一人で散策しているのですか。後で何か災難が起これたら、どうするのですか。次のように言われています。」

農業、知識、商人、妻、自分の財産、王国の監督。これらはしっかりと取り扱うべきである。それはあ
たかも、黒蛇の頭を取り扱うようなものである。(一)」

王は答えました。

「まったくその通りです。次のようにも言われています。」

王権、富、名声、楽は、善業により享受され、善業が尽きれば、自ずと消えてしまう、偉大なヨーガ行
者よ。(二)

自在神は、善業、適性、場所、力に応じて、人々に食べ物、衣服、財産を与える。(三)」

偉大な聖者はその言葉に満足して、王にカシュミールからもたらされたリングを与えました。

「王様、これを崇拜すれば、心の中にある願望を叶えてくれるでしょう。」

こうして、暇乞いをして許された王が道を歩いていたところ、あるバラモンに会いました。そのバラモンが祝福すると、王は彼にリングをあげてしまいました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座ることができます。」

第十五話

再び小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ヴァスミトラという名の宮廷祭官の息子が聖地巡礼を行い、戻って来て、王に会いました。王が近況を尋ねると、彼は答えました。

「王様、ある町でマンマタサンジーヴィニーという名の神聖な女性が呪いに悩まされております。そこには小屋が建てられており、偉大な英雄の命を復活させる準備が行われています。小屋の中ではゴマ油の入った釜が熱せられています。それらの釜の中に身を投げ込んだ者を彼女が婿に選び、その男を王位に就けるのです。彼女を妻とする者の人生は実りあるものとなるでしょう。」

それを聞くと、好奇心に駆られた王はヴァスミトラとともに出かけ、その場所ですべての出来事を目にしました。そして、釜に入った王は肉の塊になりましたが、マンマタサンジーヴィニーによつて甘露を注がれると、再び完全な身体を取り戻しました。彼女は言いました。

「私の身体と王国はあなたのものです。あなたの命じる通りにしましょう。」

王は答えました。

「あなたはヴァスミトラを婿に選びなさい。」

彼女はそれを受け入れました。そして、ヴァスミトラが王になると、ヴィクラマ王は都に帰りました。

小像が言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座ることができます。」

(未完)

(本研究は JSPS 科研費 JP16K16699 の助成を受けたものです)

【参考文献】

- Edgerton, Franklin
- 1926a *Vikrama's Adventure or The Thirty-two Tales of the Throne Part 1*. Harvard Oriental Series, vol.26. Cambridge: Harvard University Press. (Reprint. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, 1993.)
- 1926b *Vikrama's Adventure or The Thirty-two Tales of the Throne Part 2*. Harvard Oriental Series, vol.27. Cambridge: Harvard University Press. (Reprint. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, 1993.)
- Haksar, A. N. D.
- 1998 *Siṃhāsana Dvāriṇīṣikā. Thirty-two Tales of the Throne of Vikramaditya*. New Delhi: Penguin Books.
- Sternbach, Ludwik
- 1974 *The Kāvya-portions in the Kathā-literature (Pañcatantra, Hitopadeśa, Vikramacarita, Vetālapañcaviṃśatikā, Mādhavānala-kāmakandalā-kathā and Śukasaptati) : an analysis*. Delhi: Meharchand Lachmandas.
- Törzsök, Judit
- 2007 "Friendly Advice" by Nārāyaṇa & "King Vikrama's Adventures." The Clay Sanskrit Library. New York: New York University Press JJC Foundation.

新井俊一

一九九六 「ヴィクラマ王物語―『プラバンダ・チンターマニ』(物語の如意宝珠)から―」『相愛女子短期大学研究論集』第四十三号、五十五〜七十一頁。

上村勝彦

一九七八 『屍鬼二十五話―インド伝奇集』(東洋文庫三三三)、平凡社。

堀田和義

二〇一七 「宰相チャーナキヤの格言詩―*Cānakyañīṭāraṇa* 和訳(1)―」『仏教学セミナー』第一〇六号、一〜二十二頁。

二〇一九 「宰相チャーナキヤの格言詩―*Cānakyañīṭāraṇa* 和訳(2)―」『仏教学セミナー』第一〇九号(印刷中)。

水野善文

二〇一四 「語り部としてのジャイナ教徒―『獅子座三十二話』を中心に―」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』(佼成出版社)、三百六十九〜三百八十一頁。

一 *Vikramacarita* に関する以下の説明は、主として Edgerton 1926a, Sternbach 1974 にもとづく。また、水野二〇一四、三百七十一頁以下でも、これらの先行研究にもとづいて *Vikramacarita* の概要がまとめられている。

ニ ヱイクラマ王の伝説に関して、日本語で読めるものとしては新井一九九六がある。この論文では、ジャイナ教の学僧メールトゥンガの著作『ブラバンダ・チンターマニ』のヴェイクラマ王に関する物語の部分が和訳されている。

三 ジャイナ教版を中心に扱った研究としては、水野二〇一四がある。

四 Stenbach 1974 はこの試みに関してやや否定的であり、元になったテキストの写本が見つからない限り、オリジナル版の構成は分らないと考える。

五 他にも、南方版は *Vikramāṅkacarita* (ヴェイクラマルカの行跡)、韻文版は *Vikramādityacarita* (ヴェイクラマデーティヤの行跡)、もしくは *Siṃhasanadvārīṇśaka* (玉座の三十二話)、*Siṃhasanadvārīṇśaka* (玉座の三十二話) というタイトルであった可能性が高いとされる。Edgerton 1926a, p.xlix を参照。簡略版の写本に見られるタイトルの詳細については、Edgerton 1926a, pp.I-III を参照。

六 この問題に関しては、Stenbach 1974, p.237 以下を参照。

七 Edgerton が使用した写本に関する詳細は、Edgerton 1926b, p.245 以下を参照。

八 他にも、英訳として Haksar 1998 を入手したが、これは特定の版の翻訳ではなく、様々な版の内容を組み合わせた特殊なものであるため、参照するだけにとどめた。

九 他の版と簡略版の章立ての対応関係については、Edgerton 1926a, p.xxxv を参照。

一〇 *Vikramacarita* の詩節は、他の様々なテキストにも見られるものが多い。それらの対応関係に関しては、Stenbach 1974, p.257 以下の ANNEX II を参照。

一一 Edgerton 1926a は *vijñanavīśāṇḍya* を *tasmai* を限定する語と考える。Törzsök 2007 は、敬礼の目的と解したうえで、Edgerton 1926a と同様の解釈も提示する。

一二 シャーラダー (*Sārada*)。

一三 Edgerton 1926a は *svarūpa* を絶対的なもの (Absolute) の意味に解し、動詞の目的語とするが、ハッブは Törzsök 2007 の解釈に従う。

一四 Törzsök 2007 は最初の *param* を名詞、後の *param* を *dhāman* を修飾するものというように分けて解するが、

底本の *paramparam* と繋げる読みに従う。ただし、Edgerton 1926a は「至高の光明 (The Highest Light)」のように *dhāman* を「光明」、Törzsök 2007 は「力の拠り所 (the greatest seat of power)」と解するが、「常に善き人々の心の中で輝く」という点を踏まえて、異なる解釈を採った。

一五 ガウリー (*gaurī*)。

一六 偉大な自在神 (*maheśvara*)。

一七 自在神 (*īśvara*)。

一八 世界を司る女神 (*bhuvaneśvarī*)。

一九 世界の母 (*jagadambikā*)。

二〇 荒々しい女神 (*caṇḍī*)。

二一 Törzsök 2007 は *bhārata* という語を『マハーバーラタ』によれば」と解するが、この解釈には無理がある。

二二 ナーラーヤナ (*nārāyaṇa*)。

二三 幸福をもたらす者 (*sambhu*)。

二四 この詩節における生まれ (*jan*)、行い (*kriyā*)、美質 (*guṇa*) という語は、それぞれ、普遍、運動、性質を、目的 (*artha*) は意味、名 (*sanjñā*) は名称を意味する文法学的な術語でもあり、ダブルミーニングとなっている。したがって、この詩節のもう一つの意味は、「気まぐれに発せられた言葉が、普遍、運動、性質によって、いかなる意味ももたらさないならば、ただ名称をもたらすだけである」となる。

二五 ナーラーヤナ (*nārāyaṇa*)。

二六 非常に簡潔な表現であるが、この部分は *Velāpaṇḍarīnīśaṅka* に言及していると考えられる。このテキストの和訳は、上村一九七八を参照。

二七 ジャンバの敵 (*jambhārī*)。

二八 三十 (*tridaśa*)。

二九 ヴイクラマ (*vikrama*)。

- 三〇 しばしば呼ばれる者、多くの者から呼ばれる者 (puruḥiṭa)。
- 三一 *rajakalanidhi* という語は、Törzsök 2007, p.704 でも指摘されているようにダブルミーニングとなっており、「王に関する技芸 (*rajakala*) の宝庫 (*midhi*)」だけでなく、「月 (*kalaniḍhi*) のような王 (*rajan*)」も意味する。
- 三二 神々の主 (*devēśvara*)。
- 三三 「たとえ僅かであっても (*manāg api*)」という語を Edgerton 1926a は「賢者に授けた学問」だけにかけるが、^{三三}ここでは Törzsök 2007 と同様、すべてにかけて解する。^{三三}この詩節は *Cāṇakyaśāstrapāṇi* 14.5 にも見られる。この詩節も含む和訳は堀田二〇一七、二〇一九を参照。
- 三四 内容的に直前の詩節とほとんど同じであり、重複している。
- 三五 Edgerton 1926a は *merulaṅghana* を「指を交差して数えた」と解するが、^{三三}ここでは Törzsök 2007 に従った。詳しくは、Törzsök 2007, p.706 を参照。
- 三六 最高の自在神 (*paramēśvara*)。
- 三七 *devaṁsi* を Törzsök 2007 は並列複合語で「神々と聖仙」と解する。文脈からは決めがたいが、^{三三}ここでは Edgerton 1926a に従って、同格複合語で「神仙 (*divine seer*)」と解する。
- 三八 四つの部隊とは、歩兵隊、騎兵隊、象兵隊、戦車隊の四つを指し、これらを備えているものが完全な軍隊と見なされる。
- 三九 「一步」の原語は *ekakrama*、^{三三}「他の歩み」の原語は *anya-pāda* である。*krama* と *pāda* を同じものとして扱ってよいのかどうか判断し難いが、Törzsök 2007 に従った。Edgerton 1926a は、前者を二本の足のうちの一本 (*one of my feet*)、後者をその他の肢 (*my other limbs*) と解する。その他の解釈については、Törzsök 2007, p.706 以下を参照。
- 四〇 Edgerton 1926a は、*vratā* を大勢の仲間を連れた人と解するが、Törzsök 2007 の解釈に従う。解釈の違いに関する詳細は、Törzsök 2007, p.707 の注を参照。
- 四一 注二〇を参照。
- 四二 注二〇を参照。

四三 注三十人を参照。

四四 重量の単位。バーラ (bharā) は、より小さい単位のカウラー (tulā) では二十カウラーに、パラ (pala) では二千パラに相当するとされる。Törzsök 2007, p.707 の注によれば、グンジャー樹の実八つの重さがマーシヤ (masa) であり、バーラは十二万八千マーシヤに相当するという。

四五 Edgerton 1926a の解釈に従う。Törzsök 2007 は「呪文を十回唱えることに供儀を行いなさい」と解する。

四六 ārdadrakakāśāhāyām という処格を具格の意味に解する。Törzsök 2007, p.707 を参照。

四七 bhoga を Edgerton 1926a は享樂 (enjoyment) と解し、Törzsök 2007 は王室の維持 (royal maintenance) と解する。

四八 春の祭典が行われる日とされ、ここでヴィクラマ王がヴィーラセーナ王の五十倍もの財産を投じたことが明らかにする。Törzsök 2007, p.707 を参照。

四九 バラモンの生まれであったが、生前に悪事を働き、不浄な生活を送ったために、死後に羅刹になってしまった者のこと。

五〇 Törzsök 2007 が指摘するように、*dusitapraṭigraha* という語は、同格複合語と解すれば、「禁じられた報酬の收受」となり、格限定複合語で解すれば、「邪悪な者からの報酬の收受」となる。貪欲な祭官 (*grāmayajaka*) が主語であることを考慮に入れるならば、後者の可能性も考えられる。

〈キーワード〉『獅子座三十二話』 *Simhasanadvatrinīśikā* インド説話